

島田忠夫と石井鶴三

——信州大学石井鶴三関連資料から——

吉田 恵理

一 はじめに

本稿は、信州大学所蔵石井鶴三関連資料から発見された石井鶴三宛島田忠夫書簡群を手がかりに、島田の童謡詩集『柴木集』刊行前後を中心とした両者の関わりを明らかにしようとするものである。まずは島田忠夫の略歴を紹介しつつ、石井鶴三との接点について確認しておきたい。

島田忠夫（一九〇四「明三七」～一九四五「昭二〇」）は、茨城県水戸市出身の歌人・詩人・画家である。少年期から島木赤彦に師事したアララギ派の歌人であり、島木赤彦が「童話」誌の童謡欄を担当するようになったのを契機に童謡創作を始める。大正十一年六月号に「田螺」でデビュー（西條八十選）して以来、一五年七月の廃刊まで殆ど毎号に秀作を発表し、金子みすゞや佐藤義美らと並んで「童話」が生み出した代表的童謡詩人と称された。

昭和三年六月、最初の童謡詩集『柴木集』（岩波書店）を出版する。『柴木集』は、宮絵・森田恒友、表紙・小杉未醒、扉絵・萬鐵五郎、挿絵は恒友、未醒、鐵五郎、そして石井鶴三という当時の一流画家の作品を擁する。定価一円七〇銭。目次にも宮絵・表紙・扉絵・挿絵の各タイトルと画家名が記されてある。島田は昭和一八年に刊行された第二詩集『田園手帖』（照林堂書店）の「巻末記」中で、

美本として刊行された『柴木集』を振り返って「当時、全く無名の私はこれによつて多少知られる事になつた」と回想している。

このとき鶴三が『柴木集』に描いた「蛙」と題された挿絵一点が、両者の最も大きな接点である。まずはこの一点の挿絵が島田にとつてどれほど大きな意味を有していたかを書簡群から確認したい。

また書簡は最も古いもので昭和二年、最も新しいものでは昭和一年のものがあり、『柴木集』刊行以後も、結果的には成就しなかったが、挿絵創作を依頼していたこと、そして島田が画家としての石井鶴三を慕い続けたことを知らせている。

二 『柴木集』刊行まで

島田忠夫が石井鶴三と相識ることとなったのは、島田自筆の略年譜によれば昭和三年頃とされているが、新出書簡のうち最も古いものは昭和二年五月一日の日付を有する。『石井鶴三全集』（形象社）や『石井鶴三日記』（形文社）からこの頃の二人の接点に関する記述は確認できず、今回調査対象とする新出資料群は両者の関係を明らかにする貴重な資料である。以下、その最も古い日付の書簡から順に本文を紹介しつつ検討を進めたい。

①石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書4-404」）

拝呈 先日は甚だ失礼

申上「御ゆるし下されたく 右傍挿入」候。その節お願申上

候拙著のこと、萬氏病

症にありて描かれし『おたまじゃ

くし』昨日、未亡人より拝受、

悲痛なる感を深く覚え申候。

本日、寺田寅彦博士に頼みて

岩波書店へ届くことと致

し候もしこれにて印税を得ば

萬氏遺族に贈るつもりにて、何

卒御援助のほど願上候。

御依頼申した「き ミセケチ」る分は 右傍挿入 凸版につ

かまつるべしや。よろしく御願申上

候。匆々。（ハガキにて失礼と存じつつ茅ヶ崎にて記□。）

葉書の宛先は「東京市外板橋区中丸二六六／石川鶴三様」、消印の年月日は昭和二年五月一日である。差出人住所は「神奈川県鎌倉郡豊田村長尾台／島田忠夫拜」。葉書は裏面に小杉未醒の「帰牧図」が描かれた春陽会第五回展覧会出品絵葉書である。なお、春陽会第五回展は昭二年四月二三日～五月一五日に東京府美術館にて開催され、「挿絵室」が新設された回でもある。

「拙著のこと」とは翌年六月に刊行となる島田の処女詩集『柴木集』を指すものと思われる。この時点で既に『柴木集』刊行の計画

が進められ、石井鶴三に挿絵創作が依頼されていたことが知れる。

「萬氏」は画家・萬鐵五郎（一八八五「明治一八」～一九二七「昭和二」）のことで、昭和二年二月頃から病に臥し、五月一日に茅ヶ崎の自宅にて逝去した（享年四十一歳）。「おたまじゃくし」は、萬が『柴木集』のために描いた扉絵である。『柴木集』の「巻末記」でも、「しかるに茲に悲しむべきは、上梓を思ひ立ちてよりこの方、種々尽力を蒙れる萬鐵五郎画伯は、昨春かりそめの病に臥して遂にたたず、扉絵と挿絵に用いたる絵は集のためとて病床に腹這ひつつ描かれ、この世に於ける氏の最後のものとして残さるるに至つた。『柴木集』は、この絶作を得て、さらに傷ましき思ひ出を加へたのである。」と述べられている通り、萬の最期の仕事の一つとなつた。

寺田寅彦（一八七八「明治一一」～一九三五「昭和一〇」）の名も確認できるが、『柴木集』を岩波書店から出版することになつたのは寺田寅彦の推挽によるものだった。

次の書簡②はやや時を措いて翌年二月のものだが、まだ挿絵は受け取れていない。この後暫く、鶴三の挿絵を待ち侘びて恐縮しつつ催促する書簡が続く。

②石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書2-46」）

拝呈

先日は早朝「から 右傍挿入」お邪魔致して、種々御迷惑をおかけ致し、

申し訳ございません。又試作展もお蔭で拝見出来

忝く存じます。厚く御礼申上ます。

先日あれより拙著のことにて岩波に参り、主人と種々相

談致しまして、装幀挿絵共、木版写真版凸版と

それぞれ充分努力して原画「二字不明 ミセケチ」の味を損は 右
傍挿入」めぬやうに「一字不明 ミセケチ」致 右傍挿入」す「一
字不明 ミセケチ」との

事でした。それで出版も案「一字不明 ミセケチ」「外 右傍挿入」
早く、四月中に上梓の見込

です。先生のも是非それに間に合して頂きたう存じま
す。甚恐れ入りますが。右をお願ひ申上ます。

二伸

昨日、童謡集の事にて、序文を下さつた吉江喬松氏
を尋ねました。氏のお話では昨年、北海道の大沼公園

にて先生の絵を描かれるを拜見したと申し居られました。

大へん懐しがられて居「られ 右傍挿入」た事を申し添え「一字不
明 ミセケチ」へ 右傍挿入」ます。先づは要用のみ。

二月二十四日

相州鎌倉郡

豊田村長尾台

島田忠

夫

石井鶴三先生

童謡集は「柴木集」と名づけました。百姓臭い童謡ばかりなの

で「斯く 右傍挿入」つけました。表紙は和紙木版。用紙は大体岩

波の「芥川

竜之介全集」と同じだと思ひます。附記。

封筒の宛先は「東京府下板橋町中丸二六六／石井鶴三先生」とあ

り、消印の年月日は昭和三年二月二十四日である。差出人は「相州鎌

倉郡豊田村／島田忠夫」と記され、氏名の左脇に「蛙」の印が押し
てある。便箋には「PROGRESS BOND / MADE IN CANADA」の透
かしが入る。

本書簡の「試作展もお蔭で拝見出来」といった記述からも推察さ
れるように、島田と石井鶴三との関係が書物を介した作家と挿絵画
家の関係に留まらず、島田が画家としての石井鶴三を敬慕する間柄
であったことは注記しておきたい。島田自身に元來絵心があつて後
年画業に力を注いだということもある。しかしそれ以上に、島田忠
夫の創作精神を追究しようとするとき、正岡子規以来のアララギ派
と絵画の深い関わりや、「挿絵の絢爛時代」^②が近代小説のみならず近
代童謡童話運動の興盛を支えたこと、また島田がとりわけ晩年に力
を注いだ俳草画の世界など、文学と絵画の密接な関係が背景に浮か
び上がってくるのだ。

『柴木集』に即して言えば、その挿画へのこだわりのみならず、自
らの創作童謡を「童謡」ではなく「童謡詩」と称されるべきものだ
と主張したことに右に述べたことは関連してくるのだが、その考え
方は島木赤彦の写生道、及び作曲を許さなかつたという童謡観を受
け継いでおり、またその用語は本書簡中に名前の見える吉江喬松に
由来するものであつた。

吉江喬松（一八八〇「明治一三」―一九四〇「昭和一五」）は、詩
人、仏文学者で号は孤雁。大正期の童謡・童話雑誌「童話」の童謡
欄の選者を務めた際に島田を高く評価した人物である。^③

吉江と島田の関係は、共に「童話」で活躍した金子みすゞとの比
較の観点からも注目されており、奇しくも島田が「恵まれざりし女
流詩人」とその死を嘆いた金子みすゞが没後半世紀を経てブームと
なつて、当の島田自身が「忘れられた童謡詩人」となつた皮肉はつ

とに指摘されるところである。⁴⁾

しかし、先に指摘した文学と絵画の関係性や島田の創作精神の面から注目されるのは、そのような悲運のことではない。吉江は『柴木集』に寄せた序文の中で、「この詩人の作からは音楽を求めないで、画趣を求むべきである」とした上で、以下のように述べている。

童謡と童謡詩とを区別して考ふべきことを私は以前に言つたことがあつた。そして詩人が意識して作るものであるならば、それは当然童謡詩と呼ぶべきものであることを言つたことがあつた。『柴木集』に於て初めて私は自然につくられた日本の田園的な童謡詩に接して限りなき悦びを感じたのであつた。

吉江は「童謡詩」という用語とともに島田に最大級の賛辞を贈つたのである。

島田自身も「巻末記」の中で、

たゞ私のは自然に就きて写実を尊び、調また古きを好み、幼者の口へのぼせて唄ふには或は適しない。むしろ明らかに童謡詩と呼んで古来の『わらべうた』とは分ち、少年から大人に、読み且つ味はつて頂きたく思ふ。

と述べている。こうした島田の「墨絵を見るやうな」と評された「画趣」に富む作風や、島田自身の「写実」、「童謡詩」に対する思想から、島田が石井鶴三という画家とその画に寄せる思いを類推できるのだが、次の書簡③ではその思いがはっきりと述べられている。

なお、「昨年、北海道の大沼公園にて」吉江が鶴三を見かけたことあ

るのは、昭和二年に鶴三が東京日日、大阪毎日新聞の依頼で「新日本八景」の選定委員となり、六月に北海道へ渡つて大沼、狩勝、洞爺湖などを探訪した際のことと思われる。

冒頭の「試作展」は第十三回日本美術院試作展（昭和三年二月二日～三月九日）のことかと思われるが、このことに触れた鶴三からの返信があつたのだろう。次の書簡③で再度院展の話題に触れて詳しくその感想を述べている。

③石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書11-145」）

拝呈

先日は御手紙忝く存じました。院展（試作展）は大変おもしろくありました。ただ、近藤浩一路氏と

前田青郵氏の墨絵のないのが「誠に 右傍挿入」残念でした。大観先生

の「寒 右傍挿入」牡丹は「いつも乍ら 右傍挿入」おもしろく思ひました。「いつも ミセケチ」「？ ミセケチ」「いつも 右傍挿入」老大家があつた

やうに若々しい「？ ミセケチ・右傍挿入」仕事をなさる所は「実に 右傍挿入」偉いと感じました。彫刻

は観る力もなく、感じを申上げるのはお恥しい次第です

が、新海氏の「S大尉」を深く欣びました。先生の「少女像」は私共の目ざしてゐる写生（スケッチではありません）の枯淡味を

「最も 右傍挿入」深

く「出してゐると 右傍挿入」「味はひ ミセケチ」「思ひ 右傍挿入」ましたが、これは「素人の 右傍挿入」見当違ひ「だと

不可 ミセケチ」「かも知れ 右傍挿入」ません。「から申 ミセケチ」

「上げません。 ミセケチ」私も常にああ云ふ味を、歌「四字不明 ミセケチ」「など 右傍挿入」でねら

「つて ミセケチ」「ひたく思つて 右傍挿入」居ります。

童謡集は「岩波から 右傍挿入」印刷所の方へ「先 右傍挿入」日廻りました。先生のは「二字不明 ミセケチ」「二字不明 ミセケチ」今月中にお願い致したく存じます。一枚でもよろしうござ

います。もしお気分に添ひましたら、先日「島木氏の童謡

集」でお目にかきましたやうに、詩の上に入れる「かつと ミセケチ」「カットを 右傍挿入」、丁度

別紙のやうなのに、何か「おたまじやくし」のやうなもの御「三字不明 ミセケチ」

描き下さらば誠に忝く存じます。併し御気分で「二字不明 ミセケチ」如何

でも好ろしうございます。先日もお願いしやうと思つて、つひ申上にく

く、帰つて仕舞ひました。お願い致します。(その絵も凸版に致したう存じます。)

「おたまじやくし」や「蛙」を私の「は大へん 右傍挿入」好
「五字不明・私が ミセケチ」「きで 右傍挿入」子供の時分か
ら

之を好きな許りでなく、瘦せて眼の大きな「子供の 右傍挿
入」私を「友 右傍挿入」

人の ミセケチ」「だち 右傍挿入」が「か

へる」のやうだと「一字不明 ミセケチ」云う「ては笑ふ 右

傍挿入」たので、どうやら自分でも蛙のやうな気になり、「今では 右傍挿入」「おたまじやくし」を水鉢で育てたり、するやうになりました。お笑ひ下さい。

四六版

管絵木版

百五〇頁

表紙木版

挿絵 木版

写真版

凸版

カット凸版

「カット図」

蛙

蛙みち

ゆくと

田の水にひびく

てんてん音して

おたまじやくし

拵つた

御気次第で「おたまじやくし」で

なくて何でもよろしうございます。

なにか堀くさいものをおねかひ致

したう存じます。

封筒の宛先と差出人住所は書簡②と同じ。消印の年月日は昭和三年三月二日である。封筒の裏面に記載された自筆の日付も消印と同じ。便箋も書簡②と同じものである。

『柴木集』の進捗状況としては、「童謡集は印刷所の方へ先日廻りました。先生のは今月中にお願ひ致したく存じます。」とあるので、本文の校正は済んで先に印刷所に回されたものらしい。

書簡③に引き続き話題である第十三回日本美術院試作展には、石井鶴三の「少女像・顔」が出品された。日本美術院創立の中心人物であった横山大観（一八六八「明治元」～一九五八「昭和三三」）をはじめ、昭和二年に日本美術院の同人に推されて彫刻部で活躍した新海竹蔵（一八九七「明治三〇」～一九六八「昭和四三」）や、吉川英治「新書太閤記」の挿絵も傑作として名高い画家・近藤浩一路（一八八四「明治二七」～一九六二「昭和三七」）、この年の院展に初出品して同人に推挙された画家・前田青邨（一八八五「明治一六」～一九七七「昭和五二」）の名も見える。

鶴三の「少女像」を評して「私共の目ざしてゐる写生（スケッチではありません）の枯淡味」があると言ひ、「私も常にああ云ふ味を、歌などでねらひたく思つて居ります」と述べている箇所は、前段で触れた島木赤彦に学んだ写生観を指すものと見ていいだろう。⑤
文面からはアララギ派の歌人としての自負もうかがえる。第二詩集『園手帖』の「巻末記」では、次のように述べている。

『柴木集』収載の三十余篇の童謡詩は、悉く田園山野に取材したものであつたが、以来私の作風には少しも変りはない。幼時を東北の山村に生立ち、少年にしてアララギ会員となり島木赤彦先生に就いて親しく写生道に準拠した和歌を学んだのであ

るから、たとへ童謡詩であつても、根柢を流れるものは実相写生の精神である。⑥

なお、カットの話題に触れて登場している「島木氏の童謡集」は、島木赤彦による『赤彦童謡集』第一集～第三集（古今書院、大正一～大正一五年）のことかと思われる。

また、島田の「蛙」への愛着には、「お笑ひ下さい」と言いつつも並々ならぬものがあつたようだ。書簡②の印章にも「蛙」を用いているし、鎌倉に住んでいた頃には「青蛙山房島田忠夫」の表札をかけていたという。⑦

本書簡は「蛙」の挿絵を鶴三に依頼した意味の大きさがうかがえるとりわけ重要な資料である。島田が「実相写生の精神」を鶴三の創作に看取して感銘を受けたこと、「蛙」とはその精神の化身であり、その精神が拠り所とする「幼時を東北の山村に生立ち」来た自らの名なのだということが本書簡から知れるのである。

④石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書11-144」）

拝呈 先便にて厚かましく『カット』迄御願ひ申したく書きましたが、「後で 右傍挿入」反省して恐懼に堪えず、右を「改めて 右傍挿入」取消します。何卒挿絵丈け御願ひ申します。取敢ず右迄。草々。

三月三日夜

島田忠夫

石井鶴三先生

封筒の宛先は「東京市外板橋町中丸二六六／石井鶴三先生」、消印

の日付は昭和三年三月八日である。封筒の裏面と本文には三月三日の日付が記載されている。差出人住所は「相州鎌倉郡豊田村」。便箋に使用されているのは東京文房堂製原稿用紙。

書簡③で申し出たカットの依頼を翌日に慌てて取り下げている。実際『柴木集』に使用されたカットは川上四郎の作である。

⑤石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書11-137」）

石井鶴三先生の絵を待ちつつ

作りたるうた

菅すがの根の長き春日を先生の絵をまち侘びて
くらしつるかも

足おそき郵便くばりをもどかしみ門もんに出て
見る日にあまたたび

先生の絵を待ち侘びてありなれば山に木の
芽立ち野のに蕨わらびもえぬ

ころころと蛙なく夜を歌につくり先生の絵
を促うさな吾れは

先生の髯ひげなぶり吹く春かぜのころよき日
に描えきて給たまひね

島田忠夫

封筒なし。便箋に用いられているのは東京文房堂製原稿用紙。「ころころと蛙なく」の歌に事情を見易いが、これも『柴木集』の鶴三の挿絵を待つ昭和三年春頃の書簡であろう。制作年月の詳細は不明であるが、次の書簡に「御作「蛙」拝受」とある為、⑤としてここに配置した。

⑥石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「高5-303」）

拝復御作「蛙」拝受つかまつり候。

御多忙中「念 ミセケチ」を「右傍挿入」種々御無理申上げて恐縮の処態々「御 右傍挿入」電報迄相煩し誠に誠に忝く存じ奉候。早速に岩波より

印刷所へ「廻し 右傍挿入」、仰せの如くシンク版にて万全の注意を致しつつ印刷するやう、申付け「二字不明 ミセケチ」
「廻し ミセケチ」おき候。五月十五日頃出版の予定に候。その前一度校正に参上致可候。出版後

どこかへ御来会を願ひ未醒先生恒友先生又吉江先生などと記念会催したく存

居候。何れ参上の折委しく申上べく先づは
取急ぎ御礼状迄謹言頓首

四月二十四日

島田忠夫拝

石井先生

待史

封筒の宛先は「東京市外板橋町仲丸二六六／石川鶴三様」、消印の

日付は昭和三年四月二四日である。差出人住所は「相州鎌倉郡豊田村」。

待ちに待った『柴木集』の挿絵「蛙」の画稿を受け取ったこと、印刷にあたってはジंक版（垂鉛版）でとの石井鶴三からの指示があったことがわかる。

書簡②では「四月中に上梓の見込」であったが、出版は「五月十五日」の予定となつている。ここまでの書簡中でも再三鶴三の挿絵を待ち侘びて恐れながら催促する文面が確認されたが、「電報迄相煩し」て催促したとあるから、多忙な鶴三の画稿の受け取りは困難を極めたようだ。

小杉未醒（一八八一「明治一四」～一九六四「昭和三九」）は画家、歌人。昭和四年に放庵と改号。『柴木集』では表紙「藤」と挿絵「爐」を描いた。

森田恒友（一八八一「明治一四」～一九三三「昭和八」）は画家、随筆家。『柴木集』では宮絵「川かに」を描いた。未醒も恒友も、島田が幼少期から画風を好んで親しんだ画家である。とりわけ大正六年頃から水墨淡彩を主とし、「平野人」と称して田園風物素描に短文を配す画文一体の小品で諸雑誌を飾った恒友は、島田の俳草画の習得に多大な影響を与えた人物であった。

⑦石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書4-406」）

拝呈 先頃は挿絵にて御多忙中を種々

御配慮賜はり誠に忝く存じたてまつり候。只今

表紙挿絵共印刷中にて、「すべて 右傍挿入」万全を期し、岩波

にての「最美 右傍挿入」「好 ミセケチ」本とすべく「つとめ 右

傍挿入」「存じ ミセケチ」居候。扱て御好意

により「今年も 右傍挿入」春陽会より招待状頂き「まことに 右傍挿入」忝く、昨日大学の

「生徒 ミセケチ」「運中 右傍挿入」二三人と閲覧仕候。洋画もみな「うれ ミセケチ」「嬉し 右傍挿入」くな

るもの許りにて殊に放庵先生の大作、中川一政先生今関啓司先生など特にうれしく、さて反画室にて

とりどりのおもしろさ、挿絵室にて「は 右傍挿入」森田先生放庵先

生並に石井先生の「墨 右傍挿入」絵に遭ふと何か自身の親にあふやうな、しかもその親「たる 右傍挿入」や東北人にして、モンペをはいているや

うな親しさを覚え「一字不明 ミセケチ」候。最後に萬先生の遺作「一字不明 ミセケチ」の前 右傍挿入

には肌寒い程厳しゆくな感じが致し、近日「会期中 左傍挿入」も一度闊

覧するをたのしみに館を出で来り候。咄哉先生の絵なかりしは残念々々。

葉書の宛先は「東京市外板橋町中丸二六六／石井鶴三先生」、消印の年月日は昭和三年五月五日である。差出人住所は「相州鎌倉郡豊田村」。

「春陽会より招待状頂き」とあるが、昭和三年四月二八日～五月一四日には第六回展（東京府美術館）が開催されており、「版画室」が新設され、また萬鐵五郎の遺作室が特設された。

中川一政（一八九三「明治二六」～一九九一「平成三」）は画家、

随筆家、詩人。挿絵や装幀の仕事も数多く、尾崎士郎の「人生劇場」や大仏次郎の「天皇の世紀」などの新聞小説の挿絵、火野葦平の兵隊三部作や、改造社大判の『日本文学大全集』の装幀などがある。

また春陽会創立メンバーである画家の今関啓司（一八九三「明治二六」）〜一九四六「昭和二二」）や、春陽会の創立に客員として招かれて出品を続けた「咄哉先生」こと画家の田中以知庵（一八九三「明治二六」）〜一九五八「昭和二三」）の名も見える。

春陽会展覧会で観たという恒友、放庵、そして鶴三の墨絵に「何か自身の親にあふやうな、しかもその親たるや東北人にして、モンペをはいているやうな親しさ」を覚えたというのは、書簡③の注釈で触れた写生観に通じ、またいかにも「郷土」の童謡詩人と言われた島田らしい。

⑧石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号）【書11-277】

拝呈

種に御尽力を尽くし「御蔭様にて 右傍挿入」拙巻この程上梓の運びに至り本日中へ出し申し候小生印

刷中引つづき病臥したる為め校正

にも参上仕らず申訳なく「存じ 右傍挿入」候尤も校正には出

京中の佐藤理学士竹内文学士二人專

念に之にあたり殊に小杉放庵先生の表

紙絵には再三再四刷り直し「そ ミセケチ」を□で 右傍挿入」その為めに延

引致したる次第に候「表紙及 右傍挿入」萬鉄人先生の扉のおた

まじやくし森田恒友先生の管絵も共に木版

師都築徳三郎氏（岩波の芥川龍之介全集

の木版やりつつある人）が苦心を致し候写真版

と凸版は田中半七製「二字不明 ミセケチ」版 右傍挿入」作にて

「二字不明 ミセケチ」刷り 右傍挿入」小生「も 右傍挿入」病中一

度参りて□ユ主人等に会て、「詳細注意致し 右傍挿入」申し候

御作は今少しうすく刷るやう「致さむと 右傍挿入」命じ候ひしも

あのや

うに相成り申訳なく再版の折は又原画とよ

くよく対照しつつ苦心仕るべく候御容許願上候

二伸

岩波より昨日辺りお手元へ一部

上げたる事と存じ候何れ近日小生参上仕る

節一二部携へ申べし候御覧の如く「にて快 ミセケチ」

「二字不明 ミセケチ」「御蔭様にて頗る 右傍挿入」美本となり候

も偏へに先生方の御「？ミセケチ」「尽力の賜と 右傍挿入」忝

く存「？ミセケチ」じ奉候

第一刷りで千部出申候「■？」

故岩波にても相当心配「■ 右傍挿入」と存じ候定価は壹

円七拾銭にて最初は貳円の積りの処円本流

行の折でもあり紙数も勘き故「二字不明 ミセケチ」値を下げて

つけ申候岩波の話にては壹円七拾銭にては

このやうな美本にしては困難なりとの事にて従

つて小生への印税も僅かに御坐候その内訳など詳

しく申上げ先生方への御礼もご相談「ミ」煩し 右傍挿入」たく

近々御邪魔「？ミセケチ」「仕る 右傍挿入」べく候「？ミセケチ」

「?ミセケチ」取敢ず御礼詞申上候猶只今小杉先生森田先生は御在宅に候や 大阪の春陽会にお出ましに候や御伺ひ申上候 右まで 勿々頓首

六月六日

相州鎌倉郡

豊田村

島田忠夫 拜

石井鶴三先生

封筒なし。宛先の記載なし。日付は本文に六月六日の記載があるのみ。差出人住所は「相州鎌倉郡豊田村」。

制作年次は不明であるが、『柴木集』出版直後の内容であることから、昭和三年の書簡と推察した。

「小生印刷中引つづき病臥したるため校正にも参上仕らず」とあるが、島田は長く呼吸器を病んでおり、もともと鎌倉に住んでいたのは療養の為でもあったらしい。

書中にある通り、この時期出版界は円本流行の延長にあり、一般単行本の売れ行きは全集ものに阻まれ、その刊行は概ね苦境に陥ったという。

三 『柴木集』刊行後

⑨石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書11-138」）

拜呈 鬱陶しき梅雨の候、ほとほと倦み申し候。扱て種々御同情賜はりし「柴木集」この程上梓の運びに至れるを記念し、一夕粗飯を差上げたたく、何卒万障御繰り合せの上、御来会願上候。

期日 七月十日午後四時

場所 丸の内有楽町「花の茶屋」

昭和三年七月上浣

吉江 喬 松
島田 忠 夫

小杉 未醒様

森田 恒友様

石井 鶴三様

葉書に印字された『柴木集』出版記念会への招待状である。宛先は「東京市外板橋町仲丸二六六／石井鶴三様」、消印の年月日は昭和三年七月二日。差出人住所は「相州鎌倉郡豊田村」。

鶴三がこの出版記念会に出席したことは次の書簡⑩から知れる。

⑩石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書4-407」）

拜呈昨夜は御忙しき中を御来会

たまはり忝く存上候甚だ失礼申上候

何卒お容し下されたく吉江老は昨日

小愚□守宅へ断り状参り居り候何

とも失礼申上候 敬具

七月十一日 相州鎌倉郡

豊田村

石井鶴三先生

島田忠夫

拝

葉書の宛先は「東京市外板橋町中丸二六六／石井鶴三様」、消印の年月日は昭和三年七月一日。差出人住所は「相州鎌倉郡豊田村」。本文中に「七月十一日」の制作日付も見える。

「昨夜」の「会」は書簡⑨の出版記念会を指すものと思われる。

吉江の「断り状」が何を指すかは不明。

⑪ 石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書4—405」）

花の茶屋の

箱根の

画荘へ

参りました。

主人と共に

先生の絵

のおうた

を申上げ

なつかしく

覚えまし

た。

二十三日夜

島田忠夫

葉書の宛先は「東京市外板橋町仲丸二六六／石井鶴三先生」、消印の年月日は昭和三年七月二十四日。差出人住所は「箱根湯本温泉場風流菴 花の茶屋」。

裏面下部には島田自身による花の茶屋の箱根支店らしき絵が描かれている。

⑫ 石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書4—408」）

御無沙汰

申上げて

まことに

申訳ござい

ません。一

昨日院

展へ参り

御作を

拝見

致して

参り

ました。

夏来

こちらに滞在

致してをります。十月頃まで居るつもりです。御自愛下さいませ。匆々

葉書の宛先は「東京市外板橋町中丸二六六／石井鶴三先生」、消印

の年月日は昭和四年九月八日。差出人住所は「相州湯河原町敷島別館」。表面に自筆で「九月七日」の日付がある。裏面には島田の手によって滞在中の宿らしき絵が描かれている。

「昨日院展へ参り御作を拜見」とあるのは、九月三日〜一〇月四日に開催された再興第十六回日本美術院展覧会のことと思われる。鶴三は「信濃男」を出品した。

⑬石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書2-45」）

謹呈

御無沙汰申上て居ります。

御清栄のことゝ存上ます。愚生只今

院展鑑賞に上京致し引きつゞき友人宅

に厄介に相成つて居ります。

実は最近に第二童謡集を出版致し度

く存じ居ります。就きましては甚だ恐縮

には存じますが御作一点挿絵賜はり

度く御画題は御任意のものでよろし

うございます。内容の五六作童謡を

別送致しました。御一覽のうへ御執

筆賜はるやう謹んで願上奉ります。

二伸

中村清太郎様に御会ひの節よろしく御伝

言願上奉ります。

匆匆頓首

十月六日

大森友人宅にて

島田忠夫拝

石井鶴三先生

御侍史

自宅

福島県平町瀬原

大森には今月半まで滞在致し居ります

封筒の宛先は「東京市外板橋町中丸二六六／石井鶴三様」、消印の日付は昭和五年一〇月八日。差出人住所は「東京府大森駅新井宿追瀬原 竹内敏雄方」。裏面に自筆で「十月六日」の日付。

この頃島田は幼少期を過ごした福島県平町に居を移し、「いばらき新聞」や「常磐毎日新聞」に寄稿していた。

昭和五年九月三日〜一〇月四日に再興第十七回日本美術院展覧会が開催される。鶴三は「俊寛頭部試作」「踊」を出品した。

院展鑑賞の為に厄介になつて居るといふ友人竹内敏雄（一九〇五「明治三八」〜一九八二「昭和五七」）はのちの東大教授・日本学士

院会員で、歌集『冬空』の著者であった。平林武雄はアララギの歌人として旧知の仲だったかと推測している。¹⁰昭和三年の秋頃には鎌

倉極楽寺の竹内家別荘に寄寓し、竹内の援助を得て、大正一五年の「童話」の廃刊以降活躍の場を失った投稿詩人たちのうち白秋門に

属さない童謡作家を集めて昭和四年三月に同人童謡雑誌「うぶすな」を創刊している。

「最近に第二童謡集を出版致し度く存じ居ります」とあるように、この頃島田は『柴木集』に次いで寺田寅彦の紹介で第二童謡詩集

『古籬』を刊行する準備を進めていた。しかし、計画は出版界の不

況のために成就せず、昭和一〇年の寺田寅彦の他界によって未刊のままに終わった。第二童謡詩集『田園手帖』（昭林堂書店）が刊行されたのは昭和一八年八月。装幀や挿画は島田自身による創作である。

「内容の五六作童謡を別送」とは、次の書簡⑭である。

⑭石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書2—44」）

東京文房堂製原稿用紙に六篇の作品が清書されている。ここに記された六篇は第二童謡詩集『田園手帖』に収められていない。幻の詩集となった『古雛』の構想の一部を伝える貴重な資料である為、以下に作品のすべてを引用する。

〔書2—44—01〕

御返送には及びません 島田

「古雛」から六篇

〔書2—44—02〕

霜夜

病気の馬の

鼻いきが

かなしくびびく

夜の厩

〔書2—44—03〕

くすり袋の
赤玉を
提灯寄せて
さがしてる

遠山焼ける

うす明り

しんく庭に

霜おりて

腹もんでやる

父さんが

馬に話すも

さびしいな

〔書2—44—04〕

雪の村(-)

馬売の話

してるのか

源博勞の

ゐる爐ばた

〔書2—44—05〕

打身疾んでた

父さんの

こゑは小さく
さびしくて

俺と母さは
夜なべして
粉ずり白を
ひく土間に

雪ふりやんだ
小窓から
冷たく月の
明さす

〔書2—44—06〕
雪の村(二)

どんど祭の
村辻に
爺さもまじる
もんぺ穿き

〔書2—44—07〕
繭だま爰る
門松の
火はあかくと
もえさかる

メ縄かけた
道祖神

雪はやんでも
雪ぐもり

藁沓で雪
ふみながら
日暮れて戻る
街道よ

竹が爆けば
子どもらが
どんどはやしの
聲ひびく

〔書2—44—08〕
街道

熊の膽うりが
雪の村
熊皮しよつて
呼び歩く

〔書2—44—09〕
街道は昏れて

雪あかり
行燈つけた
上越屋

熊の膽売も
唄やめて
さびしく宿に
つく頃か

提灯さげて
かへつてく
学校の先生に
会ひました

〔書2—44—10〕
鴨

野鴨ななめに
おりくる里は
かぜは寒いが
野のさくら

〔書2—44—11〕
麦のあひだに
花ちる日暮
つれをはぐれた

雁かと思ふ

朝の郭公

山すそ原の
テント村
煙があをく立ちました

朝くさ刈つて
くるころは

〔書2—44—12〕
味噌汁の香もしてました

東京人が
あつまつて
野鹿の糞を見ました

やまは静かに
霧の中
郭公どりが呼んでます

⑮ 石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号）〔書2—409〕

過日は巖松堂書店

にて失礼申上しました。

厚くお詫び申上します。

近く私の編纂しました

小冊出来のうへ、拝呈

申上たく存じます。只

今茨城の湯に旅行

中にてこんな葉書に

て失礼お許し下さい

茨城関南の湯にて

十一月三十日

葉書の宛先は「東京市板橋区三丁目二六二ノ石井鶴三先生」、消印の年月日は昭和一〇年二月一日。葉書の裏面は写真「大津橋の景」。差出人住所は「東京市荒川区日暮里九一〇七六 青雲寺」。

書簡③から約五年の時を措くが、島田と鶴三の関係は継続していた。島田は昭和一〇年頃に日暮里の臨濟宗青雲寺に仮寓し、雅号を双鱼と付けて画業に力を注ぐようになる。自筆略年譜によれば、昭和一三年七月に第一回日本画個人展を東京銀座の日本サロンにて開催し、田澤田軒、三輪鄰等美術批評家の激賞を受け、以降個展を開き続けた。その傍ら評論・随筆・詩・短歌・童謡の創作も継続しており、書中の「私の編纂しました小冊」とは翌年五月創刊となる童謡の個人雑誌「田園」のことかと推察される。

最後に掲げるのは、「田園」刊行に際して発行されたと思しき案内状である。

⑩ 石井鶴三宛島田忠夫書簡（仮番号「書11—82」）

島田忠夫個人誌「田園」刊行に就いて

島田忠夫氏は故島木赤彦門下の歌人として、また吉江喬松・西條八十門下の童謡詩人として長年に亘つて力作を発表し続け、その声名は既に世に定まってゐる所でありますが、それは概して識者或は詩文に親しむ人士間のことでありまして、むしろ大衆的ではない憾があります。その門下よりは新進歌人に加藤文輝・清野重郎・遠山都・赤津興身・齋藤大の諸君を輩出し、童謡詩人に市川健次・青芝港二・山口正夫・大堀秀雄・原田小太郎・加藤明治・上原清・菊地慶治君等を算へ、女流に粹ゆみゑ・辰巳和子・徳重千歳・小澤つるの諸君を送つてゐるのでありまして、厳格且つ峻鋭な気質から尚幾多の若き人々の育成に努めつつあります。

さきに雑誌「うぶすな」を刊行し、次いで雑誌「コケモモ」を発売して幾何もなくして中絶するの已むなきに至つたのでありますが、先頃畏敬する寺田寅彦先生の御長逝に遭ひいたく哀哭し、発奮して深く期するものあり、個人誌「田園」発刊のことを計るに至つたのであります。詩歌壇並びに画壇等の諸先輩また手を拍つて賛同せられ支援を惜まぬと曰ふことあります。

島田忠夫氏は猶る雑誌経営には不適なる、所謂芸術家肌にして利害の詳細を弁ぜぬ方、故に「田園」刊行にあつては吾々童謡詩派の同人相協力して支持し、飽くまで

氏の個人誌として作品自由発表の機関たる使命を遂げ旁ら先輩又は交友門下の作品をも併せ掲載して、恰も一族の如き和氣霽々たるものを生ぜしめんとするものであります。

「田園」刊行に際しては、大方の御賛同に拠りまして、島田忠夫氏個人誌として長久に続刊を見るやう、伏而御助力を乞冀ふ次第であります。

童謡詩派同人

昭和十一年四月吉日

東京市荒川区日暮里九ノ一〇七六・青雲寺内

島田忠夫個人誌「田園」発行所

追而 田園は六月号より創刊、定価壹部四〇銭で御座います。

封筒の宛先は「板橋区板橋三丁目二六二／石井鶴三先生」、消印の年月日は昭和十一年四月二一日。封筒の裏面に「島田忠夫個人誌「田園」発行所／東京都荒川区日暮里九ノ一〇七六 青雲寺内」と印字されている。文面は活字である。

個人雑誌「田園」の詳細は明らかになっていないが、上田信道が昭和十一年五月に発行された創刊号から五冊の目次を紹介している^①。また上田によれば、この頃島田は詩歌研究のために「花東会」、童謡詩研究のために「童会」というサークルを主宰していたという。

以上、信州大学所蔵の石井鶴三関連資料から、石井鶴三宛島田忠夫書簡一六点を紹介してきた。その内容は、昭和二年の処女詩集刊行の準備段階から、昭和十一年の同人・門下による個人雑誌「田園」創刊の案内状に至る。それは『柴木集』以来の「写生」と「童謡詩」の創作精神を貫いてきた島田が、「童謡詩派」を以て同人を束ねるに至る道のりでもあった。その創作精神に石井鶴三を含めた画家たちの存在が大きな影響を与えたことは疑いない。

注

- (1) 「島田忠夫略年譜」(「さくらんぼ」島田忠夫不惑記念特輯、一九四三〔昭和八年三月〕)
- (2) 木村荘八『近代挿絵考』双雅房、一九四三〔昭和一八年〕年一二月
- (3) 島田忠夫「薄倅の童謡詩人 金子みすゞ氏の作品(一)」(『蠟人形』一九三七〔昭和十二年二月〕)
- (4) 「西條先生」(「西條八十一」吉田注)は雑誌『童話』の選を半ばに、大正十三年から二年ほど仏蘭西を中心に留学の途につかれ、一時吉江喬松先生がその童謡欄の選を担当せられた。どちらかと言へばこの時代が、金子みすゞ氏の投書生活に取つては、最も恵まれぬ様な事情に立ち至り、むしろ私は拔擢されて寄稿家に取り立てられるやうになつた。」
- (5) 山蔦恒「童謡詩人の光と影—金子みすゞと島田忠夫」(『武蔵野日本文学』二〇〇四〔平一六〕年三月)、小林和子「忘れられた童謡詩人・島田忠夫について」(『茨城女子短期大学紀要』二〇一〇〔平成二二年〕)
- (6) 近代写実主義の始祖である正岡子規の写生論が、下村為山や中村不折といった画家たちのスケッチ論や彼らとの対談に啓発されて成ったことを思い併せておくべきだろう。その子規以上に絵画と密接な関わりを持ったのが島

木赤彦である。とりわけ「アララギ」の表紙画や挿絵も担当した日本画家・平福百穂の影響は大きく、具体的に赤彦の写生論の形成と歌風の展開にどのような影響が及んでいるかについては宮川康雄氏が詳細に論じている。宮川康雄「島木赤彦における絵画」〔人文科学論集〕一九九一〔平成三〕年三月）

- (6) 島田忠夫『田園手帖』照林堂書店、一九四三〔昭和一八〕年八月
 (7) 平林武雄「わが知れる島田忠夫」〔詩季〕一九八一〔昭和五六〕年七月、「わが知れる島田忠夫」補遺〔詩季〕一九八四〔昭和五九〕年七月
 (8) 関英雄『体験的児童文学史 前編 大正の果実』理論社、一九八四〔昭和五九〕年七月

「童話」における島田省三がかかげた三つの理想——巻頭の創作童話、新人発掘、郷土性尊重——は、創刊一、二年のうちにある程度具体化した。巻頭童話は小川未明と北村寿夫、新人発掘は創作童話と童謡を中心にした投稿欄の活況、郷土的色彩は省三自身の童話と、島木赤彦、島田忠夫（島田は投稿のレギュラー）の童謡、四郎の画というぐあいに。それに八十の抒情的童謡をあわせたものが『童話』の性格を築いた。」

- (9) 『出版年鑑』国際思潮研究会、一九二七至一九二九年版
 (10) 同(7)
 (11) 上田信道「島田忠夫の個人誌「田園」のこと」(その1)(その2)(インターネット版「児童文学資料研究」一九九九〔平成一一〕年八月 [http://nob.internet.jp/shiryo/shir_77.html]、一九九九〔平成一一〕年一月、[http://nob.internet.jp/shiryo/shir_78.html])

【参考文献】

匠秀夫『日本の近代美術と文学―挿絵史とその周辺』沖積舎、一九八七〔昭和六二〕年一月

『日本児童文学大事典 第一巻』大日本図書、一九九三〔平成五〕年一〇月

『美術家人名事典―古今・日本の物故画家三五〇〇人』日外アソシエーツ、二〇

〇九〔平成二二〕年二月

『日本近代文学大事典』第一巻〜第六巻、講談社、一九七七〔昭和五二〕年〜一九七八〔昭和五三〕年

※本稿で紹介した石井鶴三宛島田忠夫書簡の翻字にあたっては、荒井真理亜氏・高野奈保氏・多田蔵人氏・出口智弘氏・松本和也氏によって作成された書簡のデータベースを活用させて頂きました。謹んで謝意を申し上げます。